

平成26年度 自然史博物館活動の評価結果

平成27年7月21日
群馬県立自然史博物館

1 はじめに

本評価は、平成23年度に策定した「活動目標の評価指標表（評価指標）」を用いた内部評価であり、昨年7月29日に公表した平成25年度の博物館活動の評価に続いて4回目となるものである。昨年度同様、本評価結果を今後の博物館活動の改善と充実につなげていきたい。

2 評価方法等について

(1) 評価指標

今回の評価に当たっては、昨年度末までに、昨年度の評価結果を踏まえ、平成26年度目標値の設定を行った。

(2) 評価作業

今回の評価は、昨年度に続き4回目となることを踏まえ、評価作業は職員7名によるWGが中心となって進め、素案作成後、職員の合同会議に諮り決定するという方法によった。

(3) 結果の公表

評価結果については、全職員にフィードバックし、個々の業務改善につなげるほか、HPにて公表し、県有施設としての説明責任を果たすために役立てたい。

※ 博物館活動の評価に至る経緯、自然史博物館の使命と事業方針等は、平成23年度の評価結果を参照してください。

3 外部評価

平成22年度の「魅力ある博物館を語る会」で示された外部評価については、平成24年度の評価から導入した。異なる分野から博物館活動に造詣の深い3名の外部有識者を専門委員に委嘱し、博物館活動に対する意見をいただき、昨年11月23日に公表した。今年度も同様に外部評価を行う予定である。

4 自己評価結果

(1) 資料の収集・保存と活用（「未来に伝える博物館」）

採集・寄贈等により収集した資料の合計点数は、目標値を4000点近く上回る9989点であった。追加される資料数は年度ごとに大きく変わるが、これは寄贈点数の変動によるところが大きい。

収集資料のデータベースは、常時サーバで運用されるとともに、定期的に磁気テープでバックアップされている。この磁気テープを万が一の事態に備え、館外での保存を行いたい。

資料は温湿度管理、日常の点検、定期的な燻蒸等により、安全に管理されている。ESCO 事業完了により、収蔵庫の温湿度は新たな空調機器により管理されている。今後も微調整を加えながら適切な運用を継続したい。

収蔵スペースの不足は以前から深刻な問題となっているが、ESCO 事業に伴う空調機器の移設で生じた空間は、現在、岩石標本を中心に収蔵スペースとしての運用が開始された。これにより収蔵スペース不足の一部を解消できた。しかし、生物標本を収蔵する第二収蔵庫の慢性的かつ深刻な課題は解消できていない。収蔵資料は常に増え続けていくもののため、これからも資料の保管場所については検討を続けていきたい。

展示での公開やレファレンスによる資料活用は、年度目標をほぼ達成しているが、これに甘んずることなく、より効果的な活用を模索していきたい。

(2) 調査研究 (「魅力を引き出す博物館」)

調査研究の推進では、昨年度は3年計画で行われる奥多野及び周辺地域総合学術調査の初年度で、延べ37回の現地調査を行った。この調査は平成25年度まで行われた上野村地域調査を発展させたものである。また、各職員が独自に行っている調査研究は10分野19研究、外部研究施設等と連携している調査研究は40研究あり、特に外部研究施設等との連携調査の件数の増加(+9)が目立つ。研究成果の公表では、発表論文数19、学会等発表数20、マスコミ等への発表17で、発表論文数は若干減少したが、前年に自然史調査報告書にまとめて成果を発表したことに加え、館の研究事業が新規テーマに移行し、データ蓄積期に入ったことが原因と考えられ、依然高い水準で発表を行ったことは間違いない。講演会講座等数は19件で、例年20件前後で推移している。市民参加型調査や市民連携の調査は4件と変動がなかった。博物館の調査研究全体として外部機関や研究者との連携により幅広い研究を推進する方向性が年々強くなってきている。一方で市民参加・連携型の調査は件数の伸びがなく、今後調査方法を含めて検討する必要があると思われる。さらにその発表の場となる「群馬のいまを伝える発表会」は発表タイトルも増え、定着してきたと思われるが、このほかミニ展示や研究報告等を通して市民に対してよりオープンな姿勢が必要と思われる。

(3) 展 示 (「知を広め、高める博物館」)

来館者数は167,500人で昨年度の166,533人を上回った。対面式アンケートによって得られたリピーター率は25年度が58%であるのに対して26年度は63%と目標値を越えた。企画展示の魅力的な内容の提供と様々な媒体による広報活動を実施しており、その効果が現れており目標値を達成することができた。常設展示では13件の資料追加・更新を実施した。

展示全体(A～Eコーナー)のケース内、常設展導入部他、ESCOの管理以外の部分について、電球交換を実施した。映像装置については、20インチモニター機器をDVDプレーヤーからSDメディアプレーヤーに更新した。劣化した展示用剥製等の修理等を行い、一部ラベル・パネル・展示用具の修正・作製・更新等を行った。

開館以来、大きな更新はなく老朽化が否めず、展示物が壊されること等もあることから、故障が頻発している。故障時の職員による対応は年間189回で、速やかに対処できる体勢が維持できている。

企画展は常設展にはないテーマを選定し、その時々話題性のある内容で夏、秋、春の年3回、冬には写真展を開催している。昨年度の企画展は順に「むし 虫 ウォッチング 2 ～潜入 昆虫ワールド～」 「闇夜の動物たち」 「根も葉もない植物の話」を開催した。写真展は「カラー魚拓展 山本龍香の世界」を開催した。夏は家族連れ、秋は学校団体を、春は家族連れなど一般向け、また季節を意識し展示を行っている。アンケート回答による昨年度の満足度は82%と前年の77%と比べて目標を上回った。予算は減少傾向にあるが、映像撮影・編集、造作物等は可能な限り学芸職員が製作しており、クオリティも向上してきている。冬の写真展はほとんどすべてが職員による手作りである。今後さらにリピーターの方々がまた足を運んでもらえるような魅力ある展示と展示方法の工夫を積み重ねていくことが肝要であり、その努力を継続していきたい。

展示解説アンケートにおける解説業務の満足度は24年度、25年度に引き続き100%という高い評価を得た。これは解説・接遇研修の実施により回数、内容を維持したことにより技量が向上したことが要因として考えられるが、さらにレベルの維持、質の向上に努めたい。

(4) 教育普及 (「知を広め、高める博物館」)

学びの魅力を感じられる事業の推進では、昨年度並みの事業を実施したが、参加者数については昨年度を10%以上上回る結果となった。また、事後アンケートでの評価も高い。サイエンスサタデーにおける魅力的な新規メニューの開発・実施、自然史講座などの講演会でのトレンドに配慮した講演内容及び講師の選定などが、参加者増につながったと考える。ビデオ上映会参加者数は2年続けて伸び悩んだが、プロジェクターの不具合によりビデオ上映会を中止せざるをえなかったことが主な要因であり、修理を急ぎたい。

学校教育支援の推進では、ビデオ上映をのぞく全ての項目で目標を達成し、特に、昨年度減少した館内授業について目標を上回ることができた。実地踏査において館内授業の魅力伝える努力をしたことが成果につながったと考える。さらに、館内授業の提供のしかたを工夫することで、利用しやすい館内授業をめざしていきたい。

ボランティア活動の登録者数と友の会活動の会員数に大きな変更はないが、どちらの活動も研修や行事の質と量を充実させてきており、主体的な活動に向けた素地が醸成されつつある。

(5) 情報の発信と公開 (「知を広め、高める博物館」)

企画展や普及イベントなどの情報発信としては、ラジオや新聞など様々なメディアを活用し行った。また、ホームページの更新やメールマガジンの発行なども積極的に行い常に最新の情報を提供するよう心掛けた。県広報を介した発信は60件、館独自からの発信が101件であった。ホームページでの新着情報では、1つ1つのイベントに対し事前には募集を兼ねた情報提供を行い、事後には活動内容報告をしている。また、年3回の移動博物館や他館連携出前教室等も博物館の情報を公開する効果的な場である。今後フェイスブックなどによる情報発信も検討している。

(6) シンクタンクとしての社会貢献（「知を広め、高める博物館」）

公共の博物館として、その有する様々な資源（資料、情報及び職員の専門性）を活用し、自治体や各種団体への専門知識の提供や講師の派遣など、シンクタンクとしての機能を充実させ社会貢献を果たすことは博物館の重要な使命の一つである。

昨年度の課題であった、学校・主任会などへの講師派遣件数は、目標値 20 件／年に対して 28 件（25 年度は 13 件）、学会・研究会における役員・委員等の受諾件数は、目標値 5 件／年に対して 9 件（昨年度は 3 件）と、いずれも目標値を超え、昨年度の件数を上回ることができた。学校や主任会への講師派遣は、博物館の専門性を広められ、学会・研究会への寄与は専門性を高めることができるので引き続き推進していきたい。

また、企画展示調査対応、調査研究対応、各種問い合わせ対応の総件数は、目標値 10 件／年に対して 31 件（25 年度は 18 件）と目標値を大きく越えることができた。これは、博物館施設等との連携強化・推進を継続してきた結果であると考えられる。さらに、他の博物館等への資料の貸出件数も 25 件（昨年度 26 件）と昨年並みに増加傾向にあった。これらの実績数は、少ない職員数のなか健闘できたと考えられる。

課題としては、レファレンス利用者の件数が昨年度よりも落ち込み、目標値にも達することができなかった。次年度以降どのような手立てを講じて、専門性を求めるニーズを増やし、対応を強化できるのか検討する必要がある。

(7) マネージメント（経営）

安全で利用しやすい博物館施設への改善では、施設改修等は予算的な制約から進展が見込めない状況である。今後は、情報システムの利用等による展示解説などでの改善を検討していきたい。

観覧者サービスの点検と質的向上では、案内業務のクオリティチェックと接遇研修を継続することで、一定の水準の確保を図っているが、更なる向上を目指したい。

博物館認知度の向上と利用者層の拡大では、富岡製糸場の世界文化遺産登録や高速道路網の整備・拡充など周辺環境が変化する中で、常に最適な活動を目指し業務の見直しを行っていかねばならない。特に、目的達成のために重要な広報活動については、これまでの活動を検証し、より効果的に進めていく必要がある。

職員の意識改革と資質の向上では、研修会・学会等への参加が少ない状況にある。予算上の制約に加え、職員の日程確保が難しくなっている面もあるが、博物館を一層魅力的なものにしていくためにも、職員には継続的なレベルアップが求められており、積極的な取組を呼びかけていきたい。

博物館支援組織のあり方については、中長期的な課題と位置づけ、運営会議において検討を進めている。より開かれた博物館づくりを進めていく上では支援組織の果たす役割は大きく、明確な方向性を持って県民参加の仕組みづくりを考えていきたい。

博物館活動への理解及び外部協力の確保は、平成 27 年度当初予算で平成 26 年度を上回る予算を確保することができた。これは、次期情報システムの開発費用を計上したことなどによるものである。また、平成 26 年度は公益財団法人からの助成を得

て企画展をより充実したものにする事ができたが、平成27年度も同様の助成を得る予定であり、引き続き外部資金の導入に努めていきたい。さらに、博物館の取組を継続して発信し、企業等からの支援増加を図っていきたい。

防災意識の向上と危機管理体制の強化では、危機管理マニュアルを改訂し2度の防災訓練を行った。マニュアルについては、随時、必要な見直しを行ってきたい。また、近年、不審者が学校等に侵入するケースがあることから、不審者対策を強化すべく、富岡警察署の指導の下、不審者対策訓練を行った。

博物館評価システムの構築では、平成25年度から外部評価を導入し有識者から意見をいただきHPで公開している。いただいた意見を受け止め、今後の博物館活動に生かしていきたい。